

病態のしくみがわかる 免疫学

関 修司, 安保 徹 編

読みやすく, 身近に感じる免疫学書

岩手医大教授・糖尿病代謝内科

佐 藤 譲

免疫学の教科書を久しぶりに手にして, まず手ごろな大きさと重さに親しみを感じた。関修司先生と安保徹先生が編集された『病態のしくみがわかる 免疫学』である。

目次に目を通し, ページをパラパラとめくると30余年前の世界が鮮やかによみがえってきた。今春亡くなられた恩師熊谷勝男先生(東北大学名誉教授)の研究室である。当時, 熊谷先生(東北大学歯学部微生物学講座教授)の元には学内外から免疫学と熊谷先生の洒洒落落で明るいお人柄に惹かれて, 多くの若手研究者が集まり熱気にあふれていた。後年その中から10数名の教授が誕生した。安保先生は熊谷教室の創生期からのメンバーである。安保先生がアメリカ留学から帰国後, 関先生も加わった。毎晩, 酒を片手にNKTや胸腺外分化Tリンパ球をさかなにした熱い議論が夜半まで続いた。時に大発見を祝い, 時に落胆したシーンが思い出される。安保先生と大学の同期の私は, 当時, 自己免疫性糖尿病(1型糖尿病)モデルのNODマウスの研究のために内科学教室から熊谷教室に通っていた。安保・関グループが連発する大発見の祝杯を何度楽しませてもらったことか。

安保先生と関先生のオリジナルな発想と研究成果を骨子に構成, 編集されたのが本書である。当時の熱気がそのまま伝わってくる。膨大な体系に取りつく島のなさを感じる現代免疫学であるが, 本書では基礎免疫学から臨床免疫学や先端的な話

題まで学生や初心者を意識して, 単なる知識の羅列ではなくストーリー性を重視して書かれている。そのためにまず感じるのが読みやすさとわかりやすさである。

I章の「免疫の基礎と全体像」では免疫システムと, 免疫に関与する細胞やサイトカインが解説され, その知識を基に次に「臓器, 疾患や病態にかかわる免疫(臨床と免疫)」が登場する。詳し過ぎず, 飽きずに臨床免疫の全体像を理解させてくれる。1型糖尿病の項目がなかったのが私には心残りである。終章の「生理機能の変化と免疫」では安保先生の真骨頂が登場する。自律神経と免疫の章の「ヒト白血球の日内リズム」の図は, 私を含む熊谷教室研究員が集団で大学の同窓会館に泊まり, 朝まで経時的に採血されてできたデータである。30数年前からの安保先生の情熱が改めて伝わってきた。

座右に置き, 生体における免疫の意味を理解するにも, 知識の補強にも利用できる。身近に感じる免疫学書である。ぜひ一読をお勧めしたい。



●B5 頁296 2010年
定価4,200円
(本体4,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-00997-3]
医学書院刊(☎ 03-3817-5657)